五．まとめ

安　世　舟

予定された時間をはるかに越えてしまい、パネリストによって提起された諸問題を順次とり上げてディスカッションを行い、論点をより深めて解明することが、残念ながら不可能となった。とはいえ「ソ連型社会主義国家の終焉と二一世紀への展望」という本日のテーマは、諸先生方によって提起された幾つかの問題点の摘出と、その理論的な解明によってある程度そのアウトラインが明らかにされたのではないかと思う。しかし、本日、取り上げられなかった問題点もなお多く残されており、このテーマについての論究は、他日、別の機会に改めて続行したいと思う。そこで、本日のシンポジウムを終えるに当って、本日のお話をある程度私なりに整理して「まとめ」にかえたいと思う。

本日の諸先生方のお話において次の三つのことがうきぼりにされたのではないかと思う。一つは、ソ連型社会主義の崩壊によって、それがその一部となっている社会主義の危機という現象である。次に、ソ連型社会主義国家の解体によって、近代国家のあり方の問題、そして最後に「帝国」の解体後の新しい秩序の形成の問題である。

「序にかえて」にも述べたように、社会主義は二〇世紀の政治を根本的に規定した力であった。顧みるなら、社会主義は資本主義システムが生み出したさまざまな不正や矛盾を正す社会正義の一形態として一九世紀初頭にヨーロッパにおいて台頭し、一八四八年を契機に、マルクスによって「実証主義と科学の時代」の一九世紀にマッチする形で「科学的社会主義」として体系化されたものであった。それが一九世紀後半にマルクスの祖国のドイツで巨大な政治運動、大

衆組織政党の形に成長し、ついに一九二〇年代にはロシアの地に特化されて体制化されたのがソ連型社会主義であった。田口教授や内田教授がそのお話の中でソ連型社会主義がその成立時の時代的・歴史的制約条件とロシア的特殊条件を受けて特化して、その特徴が作られていった経緯を詳細に分析しているが、そうした特徴をもった社会主義が七〇年近く存続し、それが社会主義の正統な体現者のごとく振舞ってきたことから、社会主義といえば、われわれは「体制としての社会主義」を思い浮かべるようになったが、実のところそれは社会主義のすべてではもちろんなく、その他に別の重要な側面が存在することを忘れてはならないであろう。それは何かと言えば、「ユートピアとしての社会主義」の側面である。資本主義が世界システムとして確立されるとともに、世界中の良心的な知識人や社会的不正を憎む純心な老若男女がこの社会主義のユートピア的側面に心引かれて、その中のどんなに多くの者が虐待や拷問に耐え、社会主義実現のために命を捧げたことか。この例はどの国においても枚挙にいとまがないぐらいである。ドイツのワイマール共和国時代に、マルクス主義的社会主義のインターナショナリズムと国家否定の思想を批判し、ワイマール共和国を擁護する「国民的文化社会主義」を提唱した、ドイツ社会民主党右派の政治・公法学者のヘルマン・ヘラーは、その遺著の『国家学』（一九三四年）において、「人間は本来ユートピア的である」ので、ユートピアという規範表象によってのみ、人間となるのであり（邦訳、未来社、一三九頁）、したがって人間社会の政治組織である国家を研究対象とする政治学も国家の「未来表象なしには形成されえない」（邦訳、九八頁）と述べている。このヘラーの主張に拠るなら、二〇世紀においてこの社会主義というユートピアが放つ光芒にふれていかに多くの人々が「人間」となったか、またこの社会主義というユートピアによって社会の未来表象を得た研究者がいかに多く資本主義国家や社会の科学的研究に携わっていったかが理解されよう。ところが、ソ連邦の崩壊によって、それがその一部となっている社会主義というユートピアが崩壊してしまった観がある。ヘラーの主張が真であるなら、われわれ人間はユートピアなしには人間となり得ないのである。

そういう意味では、社会主義を体現していたと考えられていたソ連邦――それが虚像であっても――の崩壊によって、社会主義の信奉者の間には大きな衝撃が走っているのではないかと思う。戦後の日本でも、社会科学の分野をはじめ多くの分野でマルクス主義の影響が広がり、われわれ五〇代から七〇代までの人々は多かれ少なかれマルクス主義の影響下にあるものであると言っても過言ではないぐらいである。したがってソ連邦の解体によって一種の精神的虚脱状態ないしアノミーの状態に陥っている人も皆無ではないと思う。これは日本だけではなく、マルクス主義の影響の強かったところは世界的に言えるのではないかと思う。このようにソ連邦の崩壊は、ソ連の国権的社会主義国家の崩壊ないしは消滅ということだけではなく、今後の世界の政治を方向づける上においても、「ユートピアとしての社会主義」もそれと道連れになって崩壊したと考えられるならば、測り知れないインパックトをもたらすことであろう。すでにアメリカの国務省のF・フクヤマ氏は、ソ連型社会主義の消滅をもって、これまで資本主義的な西欧の社会秩序に代わるオルタナーテイヴとして提起されたすべての秩序像が役に立たないものであること、また六〇年代に主張された資本主義と社会主義が相互に影響を及ぼし合いつつあい歩み寄るという「収斂論」も誤っていたことが証明され、今や「歴史の終焉」の時を迎えたと主張している（Francis Fukuyama, "The End of History?", in *The National Interest*, Summer 1989）。

では、フクヤマ氏のように、歴史は終焉し、今後、西欧の資本主義的社会秩序が永久に存続して行くのだろうか。そして本当に、われわれはもはやユートピアを必要としなくなったのだろうか。もしヘラーが生きていたら、ノーと答えるであろう。ヘラーが言うように、人間はユートピア的存在であるなら、ユートピアなしには生きて行けないだろう。ユートピアという未来社会の表象に照して、現在のさまざまな特徴が浮きぼりにされ、それらが未来形成的なものか、そうでないかが判断される。一九世紀において資本主義社会があまりにも多くの矛盾や不平等を生み出していたが故に、それを正す社会正義実現の一形態のユートピアとして社会主義が成立したが、当時における不平等や矛盾は多数者にな

りつつあった労働者階級の貧困の形に集約的に表現されたので、社会主義はこの貧困の経済的解決方法として社会化や計画経済論として展開され、またこれら方法を実現する政治的手段として議会主義や暴力革命論などが主張され、実践された。こうして社会主義というユートピア思想を実現する政党がロシアではその特殊な状況の制約を受けて「前衛党」論に変質し、それが主体となってロシアの地に確立していった体制が上述したようにソ連型社会主義であった。田口教授も、また内田教授も、ソ連型社会主義はロシアにおいてはある時期においてポジティヴな側面をもっていたし、時代適合的な側面があったと指摘している。こうした考え方を世界史的視野の中で展開してみると、西欧の資本主義的な社会秩序がソ連型社会主義と比べて、もしその強みを発揮しているとするならば、それは他ならぬソ連型社会主義が出現し、存続し続けた御蔭でその自己修正をはかった点に由来するのではないだろうか。つまり、西欧の資本主義諸国は、ロシアのように自国の労働者階級が社会主義を選択する方向へ大きく歩み出さないように、労働者階級の政治的・社会的要求を積極的に受け入れて体制の自己修正をたえずはかっていったからではないか。西欧諸国、とりわけＥＣの政権を担当しているのは主として社会民主主義政党であることに日本ではあまり関心が払われていない。いや北欧でも長い間、社会民主主義政党が支配してきた。したがって西欧の資本主義諸国では立憲主義的政治システムという西欧の良き歴史的伝統に依拠して、労働者階級の代表政党たる社会民主党が単独か、あるいは自由主義政党と連立を組んで、自由主義が果たし得なかった、すべての人間の自由と平等のより一層の拡大、とりわけ社会主義がその解決を提起した、貧困に象徴される社会問題を解決して、社会福祉国家を建設していった。したがって現在の西欧諸国の社会福祉国家体制も、もしロシアの地に社会主義が体制として誕生していなかったら、はたして今日のような発展をみたと言えるだろうか。そしてこの社会福祉国家体制も社会主義の一種である社会民主主義の体制であると、もし言うことができるならば、西欧諸国も社会主義国家と言えないだろうか。

こうしてみると、ソ連邦を含めて、地球の北の先進資本主義諸国において、社会主義という思想がそれが芽を出す各国の文化の制約を受けて多様な運動形態をとり、体制となることに成功したとみられないか。そして体制となった社会主義は、そのユートピア的要素を総体的に喪失して行き、ついにソ連邦の崩壊によって「ユートピアとしての社会主義」はその存在の最大の危機を迎えているのではないかと思う。こうした危機はソ連型社会主義だけでなく、社会民主主義にもみられる。それは思想、その共鳴板としてのその支持階層やその運動形態の面でも言える。広義のマルクス主義的社会主義は資本主義経済システムの矛盾の集中的表現としての人口の圧倒的多数者であるか、あるいはそうなる筈の労働者階級の貧困の解決を最も重要な課題としてかかげていた。そして、この課題の実現をはかる政治運動は労働者階級を階層的基盤にして西欧諸国では大衆組織政党の形態をとった。それはまた資本主義がとき離した生産力を無限に開花、展開させることで、つまりパイを限りなく大きくすることで、貧困という社会問題の解決、すなわち国家を通じての分配の公正化をはかろうとした。ところでこの生産力の展開とは地球という有限な資源の消費を意味する。資本主義もマルクス主義的社会主義も生産力の無限の拡大に限りなき信頼を置く点で共通しており、ソ連の場合、生産力の開発は、殆ど無にひとしい状態から出発して先進国に追いつき追い越そうとしたために、極めてスラヴ的と言うか、粗野な形で展開された。そのため、公害やチェルノブイリ原発事故にみられるようなもはや許容限度を越えてしまったとしか考えられないような環境破壊をもたらした。他方、工業化の全面的な展開による環境破壊は、もちろん西欧先進資本主義諸国にも、ソ連にひけをとらないぐらい進行している。しかしそれらの国ではこの環境破壊という人類の危険を逸早く感じとった人々の緑の運動にみられるような反対運動の台頭で、それはソフィスケートな形態をとっている違いがあった。いずれにせよ今日、広義の社会主義が東西において体制となることで、貧困という不正義はある程度解決されるような方向にあったが、その方向が逆に人類の生存基盤の地球そのものの環境破壊という最大の矛盾を生み出した。

このように、貧困という不正義の解決としての社会主義の側面がある程度実現されたが、それよにって公害問題が生み出され、さらにまた労働者階級と国家との関係も変容した。すなわち西欧諸国の労働者階級は政治的・社会的に社会福祉国家内で受益者に転化し、その結果、現状にある程度満足し、保守化していった。こうして社会主義運動の支持階層は体制内存在に転化した。他方、社会福祉国家の確立と共にその恩恵に与(あずか)ることのできない新しい人口層や、新しい社会的弱者が生み出されてきた。いやもともと存在していたが、ヘーゲルの言う「自由の理念」に捉えられ、その存在の権利を主張し始めたのである。つまり、これまで人種、性、地域、文化等によってかつての労働者階級のように差別され、無権利状態に置かれた人々が政治的・社会的同権を求め始めている。彼らは、政治的・社会的・経済的のみならず、文化や地域や性やその他のあらゆる条件による人間の差別をなくし、一人一人の人権を大切にし、同時に一人の人間の生存が他の同胞の生存を犠牲にするのではなく、すべての人間が共存する新しい社会というユートピアを求めている。そのユートピアこそ二十一世紀へ向けて生き続ける真の社会主義なのだという人もいる。そしてこの新しいユートピアという思想を実現しようとする政治運動、すなわち「底辺民主主義」運動は、これまでの社会主義政党のような大衆組織政党の形態ではなく、諸先生方が指摘しているように、ネットワークとかフォーラムという新しい運動形態をとっている。このように、これまでの社会主義は、その思想の内容の面で、また必然的にその共鳴板としての支持基盤となる階層の面でも、その存在理由を失っているように見える。なぜなら、有限な地球の資源を無限に消費することで物質的貧困の解決をはかろうとする社会主義は、逆に、環境破壊という新しい形態の社会的不正を生み出しており、さらに北の労働者階級の「豊かな生活」を保障する福祉国家化は南の発展途上国の人々の犠牲の上に成り立っており、世界大の不公正を生み出しているからである。そのうえ、社会主義がその思想の共鳴板を見出していた労働者階級は意識の上においてすでに階級意識を失っており、保守化しているからである。したがって従来のマルクス主義的社会主義は、ソ連

型社会主義の形態であれ――それはすでに拒否されているが――、社会民主主義の形態であれ、それが二〇世紀後半に顕著になった、世界大の構造的矛盾や、環境破壊や、あらゆる形態の差別等をなくすユートピアとしての生命力を回復させない限り、時代遅れとなり、いずれ歴史の波に洗わされてしまう運命にあると言えないだろうか。田口教授は、社会主義はユートピアとして生命力を保ちうるために、南側の要求に充分な理解を示し…全人類的課題としての軍縮、環境と資源の保全、人口爆発への対応に取り組む、平和で公正な世界秩序を構築していかなくてはならないとして、ケンブリッチ大学のA・ギデンズ教授のユトピアン・リアリズムに学びながら現在の世界資本主義経済体制に代わるオルタナーティヴとしての「社会主義」に現実主義的に迫って行く他ないと結論されているが、いずれにせよ社会主義は、ユートピアとしてはその内容も、またそれを実現する主体とその運動形態も、マルクス主義的社会主義の形態では、もはや歴史的にその任務を終えたとみるべきではないだろうか。

次に、本日のシンポジウムで浮きぼりにされたことは、ソ連邦の崩壊によって国民国家というかネーション・ステートのあり方の問題である。田中教授のコメントにもあるように、人権尊重と民主主義を制度の上で実現したイギリスのネーション・ステートのあり方は、ソ連型社会主義国家を陰画にたとえるとするならば、さしずめ陽画に当るといえよう。なぜソ連型社会主義は人権無視の全体主義的一党独裁国家になったのか。この問題について、内田教授は二〇世紀の各国に共通する側面とロシア国家の特殊な側面から照してみてそうならざるをえなかった理由を分析している。ヘルマン・ヘラーはすでに六〇年前に、ロシアがルネッサンスを経験せず、そしてその結果としてロシアに市民社会が成立し得なかった点に、ボルシェビズムの起源を求めているが、もしイギリスやフランスに成立したネーション・ステートが近代国家の典型とするなら、ロシアで近代国家建設がいかに困難であったかをソ連邦の崩壊が生々しく証明しているとみられないだろうか。田中教授がソ連邦の崩壊からネーション・ステートを作り上げて行くために学ぶべき教訓とし

て挙げた諸点は、今後発展途上国の近代国家建設に役立つ指針となるであろう。田中教授のように、西欧のネーション・ステートの観点からソ連邦の崩壊をみるなら、それは、かつてイギリスやフランスで前近代を克服して近代市民社会を作っていった市民革命と性格を同じくするものとみても差しつかえなかろう。われわれは、ロシアの地に人権擁護と民主主義確立の新しい市民革命が有終の美を収めることを祈る気持で一杯である。

ところで、この旧ソ連における新しい市民革命はまた同時に別の重要な側面をもっていた。すなわちすべての人間は各人その生れついた地域や文化共同体の刻印を受けており、その人格の特性はその属する文化共同体によって強く規定されているのが常であるとするなら、旧ソ連邦における市民一人一人が人権尊重と民主主義を確立せんとして立ち上がった市民革命は、同時に民族解放革命の性格をおびていたとしても不思議ではなかろう。この民族解放の問題は、最後にソ連邦の崩壊が持つ三つ目の重要なメルクマールである。

ロシアの場合、ツァーリ帝国の発展と拡大はその周辺部に向けられ、その版図は膨張し、その内にさまざまな他民族を従属化していった。レーニンはマルクス主義の要請たるインターナショナリズムを最優先させながらも、個々の従属民族の自決権を尊重していたが、ロシア革命後、ロシア帝国は解体せず、ソ連邦という形で再編され、内田教授の報告に指摘されているように、言語や文化の面でロシア・ナリョナリズムは社会主義インターナショナリズムの衣裳をまとい、連邦構成の各民族共和国の住民を従来同様、支配した。そのため、「民族の牢獄」の点ではソ連邦はロシア帝国時代と変わらなかった。スターリン体制の下で人権と民主主義が否定された上に、その民族性まで抑圧されていたロシア以外の各共和国の民族は、一九一七年、かつてツァーリ帝国の終焉の時、民族解放の革命に立ち上がったが、ボルシェヴィキ党独裁体制の確立によってその民族的革命の火をもみ消されていた。しかしその火は諸民族の心の中に強く燃え続き、今度のソ連邦の崩壊によってついに大きな焔となって燃えあがるようになった。フランスのダンコース教授は

『崩壊したソ連帝国――諸民族の反乱』（一九七八年）の中で、こう述べている。「民族は共通の記憶を軸として構成される。解放された民族が長期的に禁止された記憶を取り戻し、そこに他民族との対立の原因になった紛争やら怨恨を見出したとしても当然であり、避けられない。」（山辺雅彦訳、下巻、藤原書店、四三二頁）このダンコース教授の暗い予言が適中しないことを祈りたいが、ソ連邦を最終的に解体させたのは、連邦構成の各共和国のナショナリズムであったし、そして「民族の牢獄」のソ連邦から解放された各共和国はネーション・ステートの確立へ全力でつき進んでいる観がある。ところが、ソ連邦を構成した各共和国は、ソ連邦時代の数十年の間に、多民族混住地域になっているということ、そして共和国というのは、レーニンが行政区分を民族居住別に行った結果成立したものであること、その結果ロシアを除くと他の共和国はまだネーション・ステートの条件を揃えていないという厳しい現実が存在する点には注目すべきであろう。そして、西欧のネーション・ステートの建設からみて次の点が明らかになる。すなわち、各共和国はこれからネーション・ステートになろうとしており、それから帰結されるのは、今後、他の共和国との間に国境画定をめぐる紛争、内にあっては、各共和国に住む比較的多数の民族が少数派の他民族を同化させようとして強制するか、それに従わなかった場合に当然予想される民族間紛争という、ネーション・ステート形成期の病理現象である。それが、ナショナリズムの高揚と共に顕著になるのではないかと恐れる。もしその恐れが現実となるなら、ソ連邦の崩壊を惹起させた民主主義がその双生児の兄弟分に当る民族主義と共存せず、対立することになり、新しい民族衝突の悲劇を生み出して行くのではないか、という暗い未来が予想される。

二〇世紀は植民地帝国の崩壊の時代と言われるが、ソ連邦の崩壊によってようやく最後の帝国が消え去ったとみるなら、いずれの帝国の崩壊もその後遺症が今日まで尾を引いていることからみて、ソ連帝国の崩壊の後遺症もそれがいえるまでには数世紀を要することであろう。

短くまとめるつもりが、ついつい長くなってしまったが、以上三つのことがソ連型社会主義国家の終焉という歴史的事件について本シンポジウムの諸先生方の報告やコメントによって明らかになった点である。もっとも、経済問題を含めて、ソ連邦解体後の新しい世界秩序形成の問題などとり上げるべき問題は多いが、また改めてそれを論究する機会をもつことを希望して、本日のシンポジウムはこれをもって終了したいと思う。